

氏名（本籍）	八木澤 桂介（栃木県）
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	乙第10号
学位授与年月日	令和3年3月19日
学位授与の要件	学位規則第3条第4項
学位論文題目	ジャン＝リュック・ゴダールの作品研究 —コンテキストの形成にまつわる考察—

学位論文等審査委員

(総合審査)	委員長	教授	阪上 正巳
		教授	今村 央子
		教授	菊池 幸夫
		教授	友利 修
		准教授	三浦 雅展
		准教授	三宅 博子
(演奏審査)	委員長	教授	阪上 正巳
		教授	今井 慎太郎
		教授	今村 央子
		教授	菊池 幸夫
			久保田 晃弘（多摩美術大学教授）
(論文審査)	委員長	教授	阪上 正巳
		教授	友利 修
		准教授	三浦 雅展
		准教授	三宅 博子
			栗原 詩子（西南学院大学教授）

審査結果の要旨

審査所見

学位審査委員会は、申請者：八木澤桂介の学位申請論文および学位審査演奏会について厳正な審査を行った。以下に1. 演奏審査、2. 論文審査、3. 総合審査に関する所見を記す。

1. 演奏審査

修了作品発表会は、2021年2月7日午後0時より、国立音楽大学6号館110スタジオで行なわれ、5つの作品が上演された。作品1は《消去、情景、音景》（2015）、作品2は《その時を巡るもの：形成と離散》（2017）、作品3は《切片と片影》（2018）、作品4は《それはまるで…》（2016）、作品5は《C.: D.F. (Code: dissociation, Fragments)》（2021）である。

審査においてこの発表会は次に述べるような高い評価を得た：いずれの作品も非常によく練り上げられ、また技術的にも洗練された強度のある作品群であった。映像メディアの前提としてのサイズ、アスペクト比、解像度といったものをプログラムによってコントロールしながら、それらを変化させることの必然性を失うことなく、全体としての統一感を出していたところは見事というほかなく、一人の作家のコンサートとして十分成立していた。メディアと知覚、形式と内容、物語と詩、空間と時間、そうした相反し対立する物事同士を高いレベルで結合して

いた。ソフトウェアとハードウェアの両面で、非常に複雑なシステムの構築と運用を、破綻なくコンサート形式に落とし込んでいた。音楽と映像について、単純な一对一の関係ではなく、全体としての融合を達成していた。作品4においては、形式・反復・発展といった点で、西洋音楽的な構成を採用しており、オーディオビジュアル作品としてユニークな表現となっていた。作品5においては、映像そのものを対象とするだけでなく、映像メディアを対象とするメタレベルの視点を立ち上げており、オーディオビジュアル表現への批評性を獲得していた。年代を追うごとにコンセプトと表現手法の両面において探究の軌跡が見受けられ、作品5は時間性、空間性を伴う作品として、これまでの集大成的作品であった、などである。一方、探究テーマには一貫性があり、一作家としての個性や独自のスタイルの確立が明確に認められるとした意見も多かった。

なお、わずかではあったが、ややネガティブな論評もあった。たとえば、作品1, 2で映像と音声の関係性に疑問が残るとの指摘や、作品3, 4において高速な画像と音声の組み合わせが単調に思えるところがあったなどである。作品にゴダール作品のようなポエジーやメッセージ性が感じられなかったとのコメントも寄せられたが、それは過大な要求であって、むしろ映画や美術からの触発を自身の創作の拠り所とし、オーディオビジュアル作品の可能性を広げる営みとして今後大いに期待できるとしたポジティブな評価の方が大勢であったといえる。

2. 論文審査

提出された論文のタイトルは、「ジャン＝リュック・ゴダールの作品研究 -コンテクストの形成にまつわる考察-」である。この論文は、フランス/スイスの映画監督ジャン＝リュック・ゴダール (Jean-Luc Godard, 1930-) の1970年代から1998年までの作品のなかから《ヒア&ゼア・こことよそ》(1976)、《ヌーヴェルヴァーグ》(1990)、《映画史 第二章》(1998)の三作品を分析することを通し、これら作品傾向の異なる三作品に通底するゴダールの手法の共通点、すなわち映画を構成するコンテクストの形成手法について考察しようとしたものである。

作品分析の方法論として、申請者は平倉圭の著書『ゴダールの方法』(2013)で用いられた分析法を踏まえながら、さらに音楽における楽曲分析と同様の方法、つまり音と映像を作品のシークエンスを構成する諸要素として捉え、それらの連結・接合の様態を明らかにするという方法を採用した。より現象的・実践的なレベルでモンタージュ技法に焦点を当てることを可能とするこうした方法論を申請者が考案・実践したこと、およびこの方法論により「形態的類似による連結」や「イメージの並置によるコンテクストの形成」というゴダール独自の映画編集の特徴を取り出したという二点は、本論におけるオリジナルな成果と高く評価することができる。作品分析においては、スペクトル図、ヴェロシティ図、楽譜の組み合わせと文学的注釈によって、精密な分析に達したと評価される部分もあった。

しかし、いくつかの問題点も指摘された。まず論文全体を通し、誤字脱字が多く、助詞(てにをは)の使い方が不正確で文章に明瞭性を欠く。加えて用語表記に正確性や統一性が欠ける箇所も散見されるため、本論を記録物として文書館に残すためにはさらなる推敲が必須であると指摘された。また、初期映画史を語るさいに取り上げる作品について、コンテクストの一貫性に疑問が残る点や、参考文献が日本語で読めるものに偏っており、結果的に論述が求心力を欠くものとなってしまった点は惜まれる。本論の分析法について、音楽分析に和音進行の分析があるような、何らかの定式化された手法につながりそうかどうか、また分析によって見出されたゴダールの編集技法は何らかの映像文法の成立と考えてよいかなど、将来を見据えたさらなる考察を求める議論もあった。

一方、分析により抽出された結果、すなわち「形態的類似による連結」や、「イメージの並置によるコンテキストの形成」という特徴は、モンタージュ技法における分断と結合という観点からみると結合のほうに力点が置かれすぎており、ドゥルーズの強調する分断や切断（間隙）という契機にそれほど注意が払われなかったのはやや残念であった。統合に傾く人間の認知特性があるからこそ、イメージの生成や創造性に深く関与する切断の契機こそが重要なのではないか、したがって統合的側面を抽出した今回の結果のみではゴダール芸術の秘密には未だ十分に接近し得ていないのではないか、という疑問である。さらに、本論の射程が「映画の作品分析」に留まってしまっているのではないかとの指摘もあった。つまり、たとえば映画や映像メディアの潮流や当時の社会状況といった“コンテキスト”に対するゴダールの批評意識の問題など、映画哲学と制作技法との関連性をさらに俯瞰的な視座のもとに論じることもできるのではないかとの指摘である。

とはいえ、以上のような多くの問題点や議論にも関わらず、実践的技法としてのモンタージュに専ら焦点を当てたミクロな分析により、ゴダール映画の実際的な技法の一端を明らかにしたことは本研究のオリジナルな成果であり、本論文は博士の学位にふさわしい内容と質を備えているものと判断された。

3. 総合審査

以上のように、演奏審査、論文審査ともに高い評価が示された。総合審査では、これらの評価を確認したうえで、申請者のこれまでの研究活動の内容や、発表された業績の評価なども考慮し、総合的な審査を行った。その結果、国立音楽大学大学院博士後期課程のディプロマ・ポリシーに照らして、申請者に「博士（音楽）」の学位を授与することが相応しいと判断された。